

D-3 日本語の格脱落現象の再考～分散形態論からのアプローチ

笠井源(大阪大学大学院博士前期課程)

e-mail: u276946f@ecs.osaka-u.ac.jp

要旨: 本稿では、日本語の格脱落現象に関して先行研究である編入分析(青柳 2006)の問題点を指摘し、日本語における格・後置詞脱落の統一的な分析を提示する。K 主要部を動詞に主要部移動させる編入分析では(i)格脱落した要素が格の制約の違反を示すこと(ii)作用域を変化させる要素の格脱落が不可能であること(iii)非対格・受け身主語も格脱落を起こすことを説明できない。これらの問題点を分散形態論の枠組みで提案された切除(Obliteration)という操作(Arregi and Nevins 2012)を応用し、解決する。その理論的帰結として、切除が省略現象と同様の意味的な原理に従うことと切除が排出(Spell-Out)後の線状化の前に起こる操作だという知見が得られる。

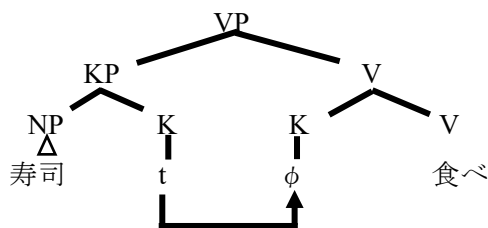
1. 導入と先行研究(青柳 2006)の外観

日本語には格脱落という現象が存在する。(1)では「すし」につく「を」格がなくとも容認される。

(1) 太郎は昨日、寿司(を)食べたらしいよ。

青柳(2006)は「編入を受けた名詞句は格付与される必要がない¹⁾」(Baker 1988)とし、格脱落現象は NP を選択する K(ase)主要部²⁾が動詞に編入(incorporation)された結果生じるものだとした(図 1 参照)。

図 1 <K 主要部の動詞(「食べ」)への編入>



しかし、この分析には課題が散見されることを二節で述べる。例えば、この分析では名詞に対する格付

¹⁾ Baker (1988)は(i)を例に挙げている。(ia)では、「来る」の意味を持つ非対格動詞である‘wan’が‘liora’に対して対格付与能力がない。そのため、‘liora’は‘ay’から斜格をもらうことで、格フィルターの違反を回避している。また、‘seuan’という主語はTから格付与されている。(1b)では、‘ay’が‘lioran’に付加されておらず、格フィルターを違反しているように見える。しかし、Baker (1988)は(1b)では編入により動詞(‘wan’)に形態的に融合している‘seuan’は格付与される必要がないと提案した。そのため、まだ格を付与していないTが‘lioran’に対して格付与を行うことができる。よって、(ib)は正文であると正しく予測される。Tが‘lioran’に対して格付与を起こしているというのは、(ib)で動詞が‘seuan’ではなく、‘lioran’の数(3PL)と一致していることから裏付けられる。

(i) a. Seuan-ide φ-wan-ban liora-de-’ay.
man-SUF 3_S-come-PAST lady-SUF-to
‘The man came to the lady.’
b. Am-seuan-wan-ban lioran.
3_P-man-come-PAST lady-PL
‘The man came to the ladies’

(Southern Tiwa, Baker 1988: 108)

²⁾ 青柳はD主要部としているが、ここでは便宜上K主要部と呼称する。

与が起こらないため、主格保持の原則や二重対格制約などの格の制約に対する違反を示さないという予測になるが、この予測は成り立たないようである(二節参照)。そのため、三節では分散形態論にて提案されている切除(Obliteration, Arregi and Nevins 2012 参照)という操作を日本語の後置詞脱落現象に応用した田川(2023)の提案を格脱落現象に拡張することを試みる。これにより、日本語の格・後置詞脱落を統一的に扱うことが可能になる。四節では、本分析の帰結として切除による格脱落と動詞句省略などの省略現象の意味的類似性を指摘する。また、切除という操作が排出(Spell-Out)後の線状化の前にかかる操作であると主張する。五節は結語である。

2. データと先行研究の課題

本節では、新たなデータ((i)格脱落した要素の格の制約の違反(ii)作用域を変化させる要素の格脱落(iii)非対格・受け身主語が格脱落可能)を示すことにより、先行研究の問題点を指摘する。

2.1 格の制約

上述したように、青柳(2006)の分析が正しければ、名詞に対する格付与が起こらない。よって、格脱落を起こした名詞句は日本語に存在する格の制約の違反を引き起こさないはずである。しかし、この予測は正しくない。以下、主格保持の原則、二重対格制約、多動性制約の順に検討する。

2.1.1 主格保持の原則(柴谷 1978)

主格保持の原則とは、「定形節では主格(「が」)を持つ名詞句が最低でも一つ必要である」という制約である(柴谷 1978)。「話せる」のような可能(状態)述語を伴った(2)のような文では、主語と目的語はそれぞれ「が」と「に」、「が」と「を」でマークすることができる。しかし、(2b)が示すように主語を「に」でマークし、目的語を「を」でマークすることは不可能である。

(2) a. 太郎が英語が/を話せる

b. 太郎に英語が/*を話せる。

ここで、青柳(2006)がいうように格脱落現象では格が付与されないとすると、主語が「に」でマークされ、目的語が格脱落を起こしている場合、主格保持の原則によりその文は非文になるはずである。しかし、「太郎」と「ケン」が「に」格でマークされている(3)のような文は、目的語の格を脱落させても正文である。

(3) a. 太郎にいいスピーチ(が/*を)できるか疑問だなあ。

b. ケンに英語(が/*を)話せると思う？

2.1.2 二重対格制約(Harada 1973)

二重対格制約とは、「一つの節に二つ以上の対格(「を」)が現れてはいけない」(Harada 1973)という制約である。(4a)では、使役を受ける対象である(「学生」)は「に」、「を」のどちらでもマークできるが、(4b)では「を」格の付与は不可能である。これは、「を」格が付与されると二重対格制約の違反となるからである。

(4) a. 太郎は学生に/を座らせた。

b. 太郎は学生に/*をLGBを読ませた。

青柳(2006)がいうように格脱落現象では格が付与されないとすると、(4b)にて「読む」の目的語である「LGB」の格が脱落した場合、使役を受ける対象である「学生」を「を」格でマークできるという予測になる。しかし、(5)の非文性が示すように「LGB」の格を脱落させても、「学生」は「を」格でマークできない。

(5) *太郎は学生を LGB 読ませた。

2.1.3 多動性制約 (Harada 1971)

多動性制約とは、「同一節内に「を」格目的語がある場合に「の」格主語が現れてはいけない」(Harada 1971)という制約である。日本語では、(6a)のような名詞に埋め込まれた節において、主語(「太郎」)が「の」格でマークできる。しかし、「を」格目的語が同一節内にある場合(6b)、主語(「太郎」)は「の」格ではマークできない。

(6) a. 太郎が/の買った本

b. 太郎が/*の LGB を買った店

格脱落現象では格が付与されない(青柳 2006)のだとすると、(6b)で目的語(「LGB」)が格脱落を起こしている場合、「の」格主語が現れることができると考えられる。しかし、(7)が示すようにそのような文は非文である。

(7) ?*太郎の LGB 買った店

2.2 作用域を変化させる要素の格脱落

日本語の「か」は作用域を変化させる要素である(Goro 2007, Shibata 2015 など参照)。(8)のような否定「ない」と「か」を含む文では、「か」が否定よりも広い作用域を取る解釈のみが可能である。また、「すしかそば」という NP に付加している「を」格は脱落可能である。

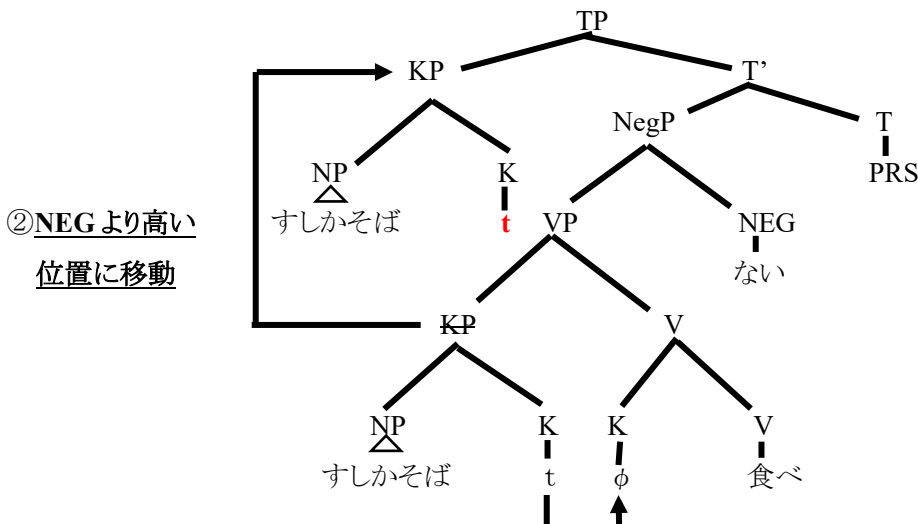
(8) 太郎は昨日、[TP [KP すしかそば(を)]_i [NegP [t_i 食べ]なか]つたらしいよ。

解釈: ✓OR>NEG すしかそばのどちらかを食べていない。(すしを食べたという状況で真)

✗NEG>OR すしもそばもどちらも食べていない。(すしを食べたという状況で偽)

ここで重要なのは、「か」が否定よりも広い作用域を取るために、「すしかそば」という NP が「ない」という NEG よりも構造的に高い位置に移動している(図 2, ②)という事実である。青柳(2006)が言うように、K 主要部が V に主要部移動(編入、図 2, ①)することにより格脱落が起こるとすると、K 主要部はそのコピー(図 2 で赤色でマークした痕跡)を適正束縛しないため、適正束縛条件(Fiengo 1977)の違反を引き起こす。よって、(8)のような文では目的語の格脱落が不可能であるという予測になるが、これは(8)で格脱落が可能であるという事実と反している。

図 2



①Kの編入

2.3 非対格・受動文主語の格脱落可能性

非対格・受動文の主語(「誰」)も格脱落が可能である(9)(前者に関しては Miyagawa et.al 2019も参照)。

(9) a. 昨日パーティに [TP [KP 誰(が)]_{it₁} 来たか] 教えて。 b. その事件で [TP [KP 誰(が)]_{it₁} 逮捕された] か知ってる？
これらの文の主語(「誰」)は動詞の補部位置に基底生成され、TP の指定部位置まで移動することが知られている。非対格・受動文の K 主要部が V に主要部移動する場合、2.2 節の議論と同様に V に編入された K のコピー(痕跡)が適正束縛されず、適正束縛条件の違反を予測する。しかし、この予測は(9)で主語の格脱落が可能であるという事実と反している³。以上、本節では、編入分析の問題点を概観した。

3. 提案: 切除(Obliteration)分析

本節では、編入分析の問題点を解決すべく、分散形態論の枠組みで提案された切除(Obliteration)という操作(Arregi and Nevins 2012)の格脱落現象への応用可能性を検討する。切除とは、PF にて語彙挿入以前に節点(node)を削除する操作である。分散形態論では、音形はレキシコンでは決定されておらず、PF にて語彙挿入(Lexical Insertion)という操作により決定される。そのため、節点が削除されると語彙挿入によって音形が追加される場所がなくなり、その削除された節点に挿入されるはずであった音形が挿入されなくなる。例えば、(10)のような後置詞「に」(cf. Sadakane and Koizumi 1995)の脱落に対して田川(2023)は(11)のような切除の規則を提案した。

(10) その本を[PP 引き出しの中]_P (に_{着点})_P 入れたよ (田川 2023: 225)

(11) 切除規則: [NP_{nonaffected goal}P] → [[NP] /] V (田川 2023: 226)

(11)は NP を補部にする P が V と線状的な隣接性を持った時、その P 節点を削除できるという規則である。(11)により P 節点が削除されると、「に」という音形が語彙挿入により挿入されなくなる。

格脱落に対する編入分析の問題点を克服するため、(11)の切除分析を格脱落現象に拡張する(12)。

(12) 切除規則(Preliminary): [[(...)[NP]X] → [[(...)[NP] /]V] (X は主要部(P or K))

(12)は V に線状的に隣接する NP を含む主要部 X を削除するという規則である。これにより、(13)のような格脱落現象は V に隣接する K が語彙挿入以前に削除されることにより派生される。

(13)(≒ (1)) 太郎は昨日、[KP [NP 寿司][K]] 食べたらしいよ。

この分析は 2.1 節の格の制約の違反の問題を解決できる。本分析では、格付与が起らない編入分析とは違い、狭義の統語部門(Narrow syntax, NS)では格付与が行われる。その後、PF 部門で切除によりその音形が付与されなくなる。よって、格の制約の違反の問題を解決できる。(14)は主格保持の制約を格脱落を起こした文が免れるというデータであった。編入分析では、格付与自体がなされないため、なぜ主格保持の原則の違反になるのかが不明であった。しかし、切除分析では一度、NS にて「が」格が付与さ

³ 筆者や他の 4 人ほどの母語話者の直観では(i)のような非能格文主語の格脱落も可能なようである。

(i) a. ? 運動会で誰走ったか教えて。

b. *誰リンゴを食べたか教えて。)

(ia)は(ib)のような目的語を持つタイプの文の主語の格脱落よりはるかに容認度が高いと思われる。

(ia)の文は主語が v や T の指定部のどちらに基底生成されるとしても、編入分析では上記で議論したような適正束縛条件の違反を引き起こすことになり、編入分析の問題点となる。

れているため、主格保持の原則の違反を格脱落を起こした文が免れる理由が説明できる。

(14) (=3) a. 太郎にいいスピーチ (が/*を) できるか疑問だなあ。 b. ケンに英語 (が/*を) 話せると思う?

また、なぜ(12)にて V と名詞の隣接性が必要なのかにも注目する必要がある。田川(2023)は、(15)のように「どこ」という場所句をかき混ぜにより主語よりも構造的に高い位置に移動させた場合、「どこ」という場所句を補部とする P 主要部の音形「に」は削除できないという観察をしている。これは格脱落でも同様であり、(16)では前置された「何」に付随する格である「を」格の脱落が不可能である。これらは場所句や目的語が前置してしまうと、V との隣接性が保証されなくなるためである。

(15) 太郎が{どこ*(に)}[_{KP} 本を]{どこ(に)}入れたか教えろ。 (田川 2023: 226)

(16) {何*(を)}[_{KP} ジョンが]{何(を)}食べたか教えろ。 (青柳 2023)

ここで、切除分析が「作用域を変化させる目的語」や「非対格・受動文の主語」の格脱落を説明できるか検討する。どちらも格脱落を起こす名詞が V に隣接しているため、編入分析ではとらえられなかったこれら二つの問題点も切除分析では克服できる。本節では、格・後置詞脱落を統一的に扱える切除分析が編入分析の問題点を克服することを示した。

4. 本分析の帰結

4.1 想定される問題への反論: 「に」以外の後置詞の脱落～省略現象との意味的類似性

日本語では「に」以外の後置詞の脱落は不可能である。(17)のように「から」や「で」でマークされた後置詞は動詞と隣接していても脱落不可能である。

(17) a. 太郎が手紙をメアリー*(から)もらったらしいよ。 b. 太郎がテニスを公園*(で)したらしいよ。

これらの例は、(12)の形式化が過剰生成を生むということを示しているのではないかという反論が想定される。しかし、(17)で後置詞が脱落できず、「に」が脱落できることは「から」や「で」でマークされる前置詞句が付加詞である一方、「に」でマークされる PP が項であることに起因するのではないかと考えられる。(18)が示すように、「から」や「で」でマークされる PP は文中で任意の要素であるが、「に」でマークされる着点項は必須である。

(18) a. 太郎は手紙を(メアリーから) (公園で)もらった。 b. 太郎は*(箱に)ボールを入れた。

付加詞である要素から前置詞が脱落すると、「から」や「で」が担っていた意味が回復できないため、適切な意味解釈が行えないと考えられる。これにより、(17)で後置詞の脱落が不可能である事実が説明される。一方、動詞は着点を表す「に」がついた PP は項であり、「入れる」や「置く」のような動詞から意味役割を受け取れる。よって、「に」が脱落していても適切な意味解釈が可能である。

また、これは決して ad hoc な想定ではなく、VP 省略のような省略現象と同じ原理が働いていると考えられる。VP 省略は PF で音形が削除されると多くの研究 (Aelbrecht 2010 など) で主張されている。(19)では、‘draw an elephant’ という VP が先行文 VP との意味的に同一⁴であるため、削除されている。

(19) Jasmin can draw an elephant, but Ryan can't [_{VP} draw an elephant]. (Aelbrecht 2010: 1)

⁴ 近年の省略現象では、意味だけでなく統語的な同一性の重要性も再認識されているが、ここでは便宜上、意味の同一性のみに対して議論をする。

(19)にて VP が省略できるのは、前文からその意味を回復できるからである。このように「意味役割の付与」や「前文との同一性」などの何らかの方法で意味が回復できる場合に、要素が削除できると考えられる。よって、(20)の原理を省略現象と後置詞脱落を包括する原理として提出できる。これは(17)を適切に排除する。

(20)⁵ 回復原理 (Recoverability Principle): 意味が回復できる場合のみ、要素の削除は可能である。

4.2 切除が起こるタイミング

本節では、切除が起こるタイミングに関して議論する。分散形態論において、二種類の形態操作が考えられる。統語部門で構築した階層構造を語順に変換する線状化が起きる前の操作とその後に起こる操作である (cf. Embick and Noyer 2001)。前者には階層構造を参照できるという特徴が、後者には線的な隣接性のみを参照する特徴がある。Embick and Noyer 2001 では、T にある屈折形態素を V に移動させる Lowering という形態操作は線状化が起きる前に適応される操作であり、構造を参照するため、(20)の ‘always’ のような介在要素を無視して適用できる。一方、英語の est-最上級の派生に用いられるとされている Local Dislocation という操作は線状化が起こった後の操作であるとされている(Embick and Noyer 2001)。英語の最上級の派生は(21b)のように ‘amazingly’ のような介在要素が最上級と形容詞の間に存在する場合、est-という最上級を表す接尾辞が形容詞(‘smart’)と結合しない。これは、線状化を受けた後の操作が線的な隣接性のみを参照する操作であるということを示している。

(20) Taro **always** plays tennis.

(21) a. John is the smart-est/*most smart person....

b. Mary is the most **amazingly** smart/ *amazingly smart-est person ... (Embick and Noyer 2001: 565)

(12)で、格・後置詞脱落に用いられる切除規則を線的な隣接性に基づいて定義したが、これが正しければ、(22)や(23)のような例を説明できない。(22)では、「昨日」という要素が「LGB」と「カバンの中」という格・後置詞が脱落している要素に線的に介在しているが、それらの脱落は可能である。また、(23)では「花子」という名詞句は動詞(「買う」)に線的に隣接しているが、「が」格の脱落は不可能である。

(22) a. 太郎は LGB(を/*は)_[adv 昨日]読んでたよ。 b. 太郎は LGB をカバンの中(に)_[adv 昨日]入れてたよ。

(23) ジョンは太郎が LGB を買ったかに加えて、花子*(が)_{pro} 買ったか知っている。

よって、切除という操作は線的な隣接性を参照するのではなく、構造を参照する操作、即ち線状化が起こる前の操作であると考えるのが妥当である。よって、(12)を(24)に再定式化する。

(24) 切除規則(finalized):

SD: V と V からもっとも構造的に近い NP を含む要素 XP, SC: [[(...)[NP]X] → [[(...)[NP]] (at PF)

(24)は「昨日」という副詞が NP を含まない要素であると仮定すると、(22)の格・後置詞脱落が可能であるという事実を説明できる。また、(23)において、「花子」という主語が「が」格を脱落できないのは、構造的に V から近い NP を含む要素である pro が介在しているという事実から説明できる。(24)は PP と NP 両

⁵ しかし、このような原理がどのレベルで働くのかは議論の余地があると考えられる。その可能性の一つとして、分散形態論にて仮定されている Encyclopedia がその役割を担うということが考えられる。

方にかかる規則であるため、格・後置詞脱落の可能性を統一的に説明できる。ここで、お互いがお互いの介在要素となるという予測が成り立つが、この予測は正しいと思われる。(25)は KP が KP、PP が KP、KP が PP、PP が PP に介在する場合、名詞句、前置詞句(それぞれ「何」、「誰」、「どこ」、「カバンの中」)における格・後置詞脱落は不可能である。

(25) a. {[**KP** 何*(を)]}[**KP** ジョンが]{何(を)}食べたか教えろ。[**KP**, **KP**]

b. 昨日、[**KP** 誰*(が)] [**PP** パーティに]来たか教えて。[**KP**, **PP**]

c. 太郎が{[**PP** どこ*(に)]}[**KP** 本を]{どこ(に)}入れたか教えろ。[**PP**, **KP**]

d. 太郎は LGB を[**PP** カバンの中*(に)] [**PP** 教室で]入れてたよ。[**PP**, **PP**]

また、切除操作が線状化の前に起こるという主張は Arregi and Nevins (2012)の主張とも合致し、それを裏付けるものである。

5. 結語

本稿では、日本語の格助詞の脱落に関する再考を通じて、先行研究である編入分析に対する切除分析の優位性を論じた。その帰結として後置詞脱落における意味的な制約の省略現象のような他の現象との平行性を指摘し、回復原理として定式化した。また、切除という操作の起こるタイミングが線状化の前であると主張し、これは Arregi and Nevins (2012)の主張と合致することを示した。

参考文献

- Aelbrecht, L. (2010). *The syntactic licensing of ellipsis*. John Benjamins.
- Arregi, K., & Nevins, A. (2012). *Morphotactics: Basque auxiliaries and the structure of spellout*. Springer.
- 青柳 宏(2006). 『日本語の助詞と機能範疇』. ひつじ書房.
- Baker, M. (1988). *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. University of Chicago Press.
- Embick, David, and Rolf Noyer. 2001. Movement operations after syntax. *Linguistic Inquiry* 32:555–595.
- Fiengo, R. (1977). On trace theory. *Linguistic Inquiry*, 8, 35-61.
- Goro, T. (2007). *Language-Specific Constraints on Scope Interpretation in First Language Acquisition*.
Doctoral Dissertation. University of Maryland.
- Harada, S. I. (1971). Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese. 『言語研究』60. 25–38.
- Harada, S.I. (1973). Counter equi NP deletion. *University of Tokyo Research Institute of Logopedics and Phoniatrics. Annual Bulletin* 7, 113–147.
- Miyagawa, S, D, Wu, and M, Koizumi. (2019). Inducing and blocking labeling. *Glossa: a journal of general linguistics* 4(1): 141. 1–26
- Sadakane, K. and Koizumi, M. (1995) On the nature of the "dative" particle ni in Japanese. *Linguistics* 33, 5-33.
- Shibata, Y. (2015). *Exploring Syntax from the Interface*. Doctoral Dissertation. University of Connecticut.
- 柴谷 方良(1978). 『日本語の分析』. 大修館書店.
- 田川 拓海.(2023).分散形態論におけるゼロ形態とその削減.『分散形態論の新展開』. 212-235. 開拓社.